

体験談・官能小説 R-18

——その夜、板がざわめいた——

彼女の母親に逆NTRされた夜～ 48歳熟女誘惑～

実話投稿板より

TOR-NET

R-18

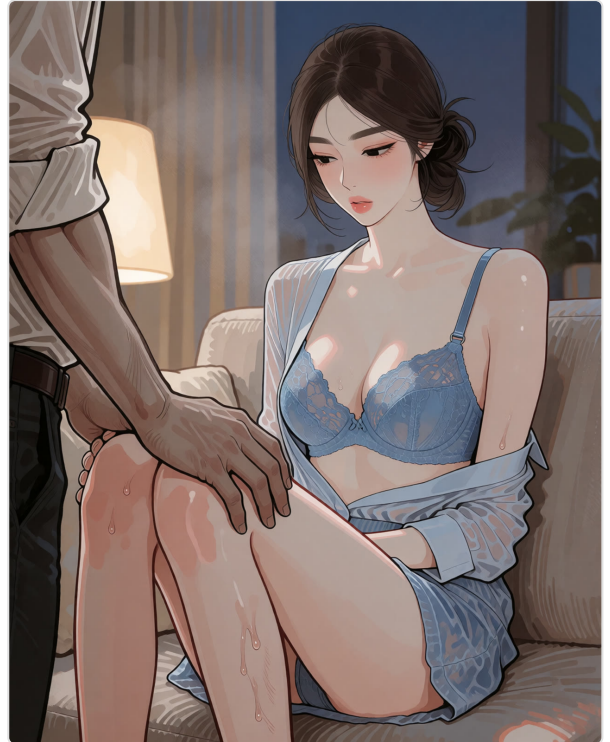
©2026 TOR-NET

本作はフィクションです。実在の人物・団体とは一切関係ありません。

俺。25の普通のサラリーマンだよ。

今ここで、彼女の母親にやられたことを、ありのままに吐き出してる。梅雨のじめじめした夜、あかりの実家に初めて挨拶に行った日のこと。父親は出張で不在って聞いてた。玄関で由美子さんに「どうぞ」と笑顔で迎えられて、居間に通された瞬間から、空気がちょっと違った。

由美子さん、48歳。細身だけど胸元にボリュームがあって、薄手のブラウスが湿った梅雨の空気ですり肌に張り付いてるのが目についた。あかりはまだ会社から帰ってなくて、家の中は二人きり。時計の秒針がカチカチ、静かに響いてる。台所から「お茶淹れますね」と声がして、由美子さんが近づいてきたとき、俺はソファに座ったまま固まった。



「拓也くん、緊張してるの？」って、優しい声で囁かれて、膝に手のひらが置かれた。最初はただの励ましみたいにしたのに、指が太ももの上をゆっくり這うように動いて、熱がじわじわ染みてくる。息が耳元にかかった。甘い香水と、台所で使ってた石鹸の匂いが混ざってる。「あかりちゃん、遅いわね…」って言いながら、由美子さんの胸が俺の腕に触れた。柔らかくて重い感触が、シャツ越しに直接伝わってきて、俺は反射的に体を引いた。でも膝に置かれた手は離れなくて、むしろ指が少し強く握り返してきた。

「いい子ね…」って、笑いながらシャツのボタンを一つ外される。心臓が跳ねて、頭の中で「やめなきゃ」って叫んでるのに、下半身はもう正直に反応してた。股間の熱が痛いくらいに膨らんで、ズボンの生地がきつくなるのが自分でもわかった。由美子さんはそれを感じ取ったみたいに、ゆっくりと手を滑らせて、ファスナーの上から優しく包み込むように握ってきた。息が止まった。指がゆっくり上下に動き始めて、布越しなのに熱と圧力がストレートに伝わってくる。

あかりの写真が壁にかかっているのが目に入って、罪悪感で胸が締め付けられた。でも由美子さんの指は止まらなくて、時々親指で先端をなぞるように刺激してくる。俺は声を殺して「由美子さん…」ってか細い声で言っただけ。彼女は「大丈夫、誰にも言わないから」と耳元で囁きながら、ボタンをもう一つ外して、手を直接肌に這わせてきた。熱い指が下着の上から包み込んで、ゆっくりしごくように動くたびに、腰が勝手に浮きそうになる。抵抗しようとして脚を閉じて、由美子さんは体を寄せてきて、胸を腕に押しつけるようにして動きを封じてくる。

時計の音だけがずっと響いてて、どれだけ時間が経ったかわからなかった。由美子さんがイくときは、目がちょっと焦点を失って天井の一点を見つめて、瞳が小さく震えてたのが妙にエロかった。俺も結局、彼女の手に導かれるまま、ぐちゃぐちゃにされてしまった。あの夜はそれで終わったけど、次の日由美子さんから電話があって「また来て」と優しい声で言われたとき、俺はもうどうしようもなかった…。

-
- 002 名無しさん 梅雨の夜に彼女の母親に膝に手置かれてそのままやられるなんて、普通のサラリーマンにはありえねえ話…よな
-
- 003 名無しさん >>1 父親が出張で不在って聞いてたのに、由美子さんが台所でお茶淹れてる時点で家の中に誰がいるのは自然だろ、ちょっと設定の粗があるよ
-
- 004 名無しさん >>2 お茶淹れますって言ったのにいきなり膝に手置く流れ、タイミングが合ってねえよな
-
- 005 名無しさん 由美子さんの胸が腕に当たったって…マジで
-
- 006 名無しさん 25のサラリーマンが48歳にやられる
-
- 007 名無しさん あかりの実家で
-
- 008 名無しさん 由美子さんまた来てって電話かけてくるの
-
- 009 名無しさん 由美子さんエロすぎて草 あの手の動きマジで羨ましいわ
-
- 010 名無しさん 由美子さん48歳でそんな積極的な手つきとか現実味ねえわ
-
- 011 名無しさん >>1 あかりの実家で父親不在のタイミングでこれって完全に誘ってるだろ
-
- 012 投稿者 >>3 設定とかじゃねえよ、実際あった話だ
-
- 013 名無しさん 由美子さんの指の動きがエロすぎて草、もっと詳しくkwsk
-
- 014 投稿者 >>4 お茶淹れてる最中に膝に手置かれたんだよ、急だった
-
- 015 名無しさん 25で48歳の母親にやられるなんて羨ましすぎるだろ
-
- 016 名無しさん 次の電話でまた行ったってことは本番あったのか？
-

実況台本

んっ……あっ……待って、拓也くん……そんな、膝の上に……手、置かないで……

あかりの彼氏なのに……どうして、こんな……夫が出張でいないからって、こんなこと……いや、だめ……指、止めて……

はあ……んっ……ボタン、開けないで……肌、触れられたら……あっ……！　そこ、直接……

くっ……熱い……指先が、こんなに……あかりが台所で飲み物作ってるのに……すぐそこなのに……

だめ、声、出ちゃう……んっ……あっ……

はあ……んんっ……そこ、触らないで……もう、濡れて……いや、そんなこと、言いたくない……でも、拓也くんの指が……布越しに、押し込んで……あっ……！

やっ……！　あっ……あっ……指、入って……だめ、そこ、擦らないで……んっ……あっ……あっ……

夫の……あかりの……なのに、体が……勝手に、震えて……くう……んんっ……

あっ……あっ……だめ、そんなに動かさないで……声、漏れる……んっ……はあ……はあ……

拓也くんの手……熱くて……指が、奥まで……あっ……！　そこ、だめ……気持ち……いや、違う……

んっ……あっ……あっ……指、抜かないで……いや、そんな……

はあ……はあ……体、熱い……頭、真っ白に……

あっ……あっ……だめ、イっちゃう……んっ……あっ……あっ……！

っ……あっ……！　だめ、イっちゃ……んっ……あっ、あっ……！

はあ……はあ……拓也くん、待って……本当に、だめ……あかりの……あかりの彼氏なのに……んっ……！

あっ……そこ、擦らないで……声、出ちゃう……夫が、いつ帰ってくるかも……あっ……！

んっ……はあ……はあ……指、動かさないで……抜いて……お願い……

なのに……体が、勝手に締め付けて……くう……んんっ……

あっ……あっ……だめ、そんなに……奥、触れないで……

頭、真っ白に……いや、違う……これは、ただの……んっ……あっ……！

夫のことも、あかりのことも……思い浮かぶのに……体が、熱くて……

んっ……はあ……はあ……指、抜かないで……いや、そんなこと……

声、漏れちゃう……あっ……あっ……だめ……！

くう……んんっ……こんな……私、おかしくなっちゃう……

拓也くんの指……熱くて……動くたびに、濡れた音が……あっ……！

だめ、そこ、ずっと擦らないで……イっちゃう……本当に、イっちゃう……

んっ……あっ……あっ……！　はあ……はあ……やめて……お願い……

なのに……体、震えて……止まらない……

夫の……あかりの……なのに……んっ……あっ……！

>>2 梅雨の夜に膝に手置かれてそのままやられるなんて普通のサラリーマンにはありえねえ話よな、って言われても、実際俺がその普通の25歳サラリーマンなんだから仕方ねえだろ。信じらんねえ気持ちはわかるけどよ。

あの夜、由美子さんが台所で茶淹れてる最中に、突然膝に手のひらを置かれた瞬間、俺の頭ん中が真っ白になった。指先が布越しに熱を伝えてきて、じわっと圧がかかる。俺が「え……」って声を出しかけたら、由美子さんは笑うでもなく、ただ低い声で「拓也くん、膝、震えてるわね」って囁いた。あかりはまだ帰ってなくて、家の中は台所の照明だけが落ちてる。時計の秒針がコツ、コツって響いてる音が、妙に耳について、由美子さんの指が膝から太ももに這うように動いたとき、俺は息を止めた。抵抗しようとしたけど、身体が先に熱くなって、ズボンの内側で反応してるのが自分でも情けなくて、でも指が止まらない。



翌日の夕方、スマホが震えた。画面に「由美子」って出てるの見て、胸が一瞬止まった。出ないわけにもいなくて、耳に当てたら、すぐにあの低い声が流れてきた。「拓也くん？ 昨日は急でごめんね。寂しくて、つい手が……」って、わざとらしく息を吐きながら笑う。台所の時計がコツ、コツって秒を刻む音が、背景でずっと聞こえてた。あかりはまだ会社から帰ってきてなくて、家の中は静かすぎる。

由美子は電話の向こうで「今夜は父親も出張でいないから、もしよかったらまた来てくれない？」って聞いてきて、俺が「え、でも……」って詰まらせたなら、すぐに「膝、震えてたでしょ。あの熱、忘れられないでしょ？」って、容赦なく突いてくる。声が耳の奥に染みて、ズボンの中で反応してる自分が情けなくて、でも指が止まらない。彼女はさらに「拓也くんのその反応、想像しちゃうわ」とか囁いてきて、俺の頭ん中が真っ白になった瞬間、由美子の吐息がちょっと震えた。焦点の合わない目で天井の一点をじっと見つめて、瞳がわずかに震えるような、抑えきれない吐息が漏れた。

なんか……まあいーや。

その電話のあと、由美子は「明日の夜、ちゃんと鍵かけておくから」って、静かに言ってきた。

002 名無しさん 寝言は寝て言えよ。茶淹れてる最中に膝に手置かれて実際俺がって、指が這うように動いた瞬間とか自演くさすぎ

003 名無しさん >>1 茶淹れてる最中って君が勝手に盛った設定じゃん

004 名無しさん >>4 興奮して文が途切れまくりで草

005 名無しさん 膝に熱が伝わって…指が太ももに這って…電話で寂しくてって…w

006 名無しさん クズが

007 名無しさん >>5 クズがとか言ってる奴も釣り乗ってるだけだろ、全部盛りの嘘松

008 名無しさん 電話の背景で時計の音がずっとコツコツって、わざとらしい演出だな

009 投稿者 >>18 >>23 盛ってるって言うなら具体的にどこが嘘か言ってみろよ

010 名無しさん 指が這ように動いた瞬間で興奮して文が切れてるの草

011 名無しさん 由美子さんが父親出張って言ってる時点でヤバイ匂いしかしねえ

012 投稿者 >>21 笑うとこじゃねえだろ、実際あったことなんだから

実況台本

……拓也？ 今、声が小さくてよく聞こえなかったわ。

ええ、明日の夜……鍵、かけておくから。

……ごめんね、こんな時間に電話してしまって。あなた、忙しいのに。

あかりはもう寝てるのよ。……だから、安心して。

んっ……

拓也……本当に、いいの？ あの子が好きなんだろう？ ……私なんかじゃなくて。

あなたがこんなこと、絶対に許さないわよね。……私も、こんなことする人じゃなかったのに。

……明日の夜、来るの？ 本当に？

ごめん……ごめんなさい。

鍵は、いつも通り台所の引き出しに入れておくから。

……ん。

拓也……本当に、私でいいの？ あかりの母親なのに。

あなたが帰ってきたら、全部終わらせなきゃいけないのに……どうして、こんなに。

……じゃあ、明日の夜ね。

おやすみ、拓也。

……ごめん。

……はあ……んっ……

本当に……こんなこと、してるんだ……あかりの彼氏と、電話でこんな約束して……

あなたが帰ってくるまで、って決めてたのに……まだ十日もあるのに、もうこんなに……

……拓也くんったら、笑ってた……あの低い声で……

だめ……これ以上は……でも、鍵はもう、入れておくって言っちゃった……

あかりが会社から帰ってきたら、普通の母親でいなきゃいけないのに……今夜は、こんなふう一人で……

……ん……あ……

ごめん……本当に、ごめん……でも、指が、離れない……

明日……拓也くんが来たら……また、こんなことになるんだ……

……ごめん、ただいまって、笑顔で迎えられなくなる……

……もう、遅いよね……

拓也くん……本当に、私なんかで……いいの……？

>>28 由美子の指が肩に沈み込んで、親指の腹が首筋をゆっくり押すたびに熱がじわじわ染みしてくる。梅雨の夜で部屋の中は蒸してて、台所の時計がコツコツ鳴ってる音だけが妙に耳について、あかりはもう奥の部屋で寝てるってさっき聞いたばかりだ。父親は出張でいないって由美子さんが笑いながら言ったとき、俺はまだ「ただの挨拶の夜」だと思っていた。

「拓也くん、肩こってるでしょ？ 社会人って大変よね」

由美子の声が後ろから低くて、息が耳の近くにかかる。指が肩から首筋へ這うように動き、親指でぐっと押された瞬間、俺の体がびくっと跳ねた。抵抗しようとしたけど、腰の辺りまで指が降りてきて、シャツの端を少し持ち上げるようにして肌に触れた。熱い。指の腹が直接肌に当たって、ゆっくり円を描くみたいに揉まれると、股間が疼き始めてるのが自分でもわかった。

「由美子さん……ちょっと、」

声が出て、指は止まらない。逆に背中へ回って、腰のラインをなぞるように触れられて、俺は思わず息を詰めた。由美子さんはくすっと小さく笑って、耳元で囁いた。

「寂しいのよ……あかりはもう大人だし、うちに男の人なんて久しぶりでさ」

その言葉と同時に、指が腰の骨のあたりを軽く掴むようにして、俺の体を少し後ろに引き寄せる。股間がズボンの中で痛いくらい硬くなって、由美子さんの胸が背中に当たる感触がはっきりわかった。柔らかくて、重くて、熱い。俺は「やめ……」って言いかけたけど、言葉が喉で詰まって、ただ息を荒くするだけになった。

由美子さんの指がさらに下がって、太ももの内側を這うように触れた瞬間、俺は思わず太もものに力を入れてしまった。でも指は容赦なく、ズボンの上からでもわかるくらいにゆっくり撫で上げてくる。

「これ……あかりに内緒で、使ってちょうだい」

ポケットから出した合鍵を、由美子さんが俺の手に押しつける。冷たい金属が掌に当たって、由美子さんの指が俺の指に絡むように重ねられた。鍵を握らされたまま、由美子さんはもう片方の手で俺の耳たぶを軽く摘んで、息を吹きか



ける。

「5日目にまた来なさいよ……今度は、もっとちゃんと。鍵、ちゃんと持ってきてね」

俺は「由美子さん……本当に……」って、掠れた声でしか返せなかった。由美子さんは満足げに笑って、指をゆっくり引き抜きながら、最後に太もみを軽く押すようにして離れた。その感触がまだ残ってる。鍵は今も俺のポケットの中で重い。

次の夜、俺はあの鍵を使ってまた行くことになる。由美子さんの指の熱と、耳元で囁かれた「寂しいのよ」が、頭から離れねえ。

002 名無しさん うわぁ…首筋に指が沈み込んでるとコツコツの時計の音がリアルすぎて部屋の空気まで伝わってくる

003 名無しさん >>1 うわぁ…で済ませるなよ、ただの挨拶の夜が急にそんな展開になる社会人生活ってどんなんだよw

004 名無しさん >>6 関係ない話始めるな、部屋の中で社会人って言葉が出てくる時点で設定が浮いてるだろ

005 名無しさん 首筋の熱…コツコツの音が耳について…由美子さんの指が…

006 名無しさん 続き

007 名無しさん 梅雨の時期にこんな鍵の話聞くと通勤の電車で傘忘れそうになるわ

008 名無しさん 全部盛りの嘘松、ただの挨拶の夜が急に鍵渡しとかありえねえ

009 投稿者 >>4 時計の音と部屋の空気は実際にあったこと

010 名無しさん 鍵を押しつけられた瞬間が一番ヤバい、5日後どうなるか正直気になる

011 名無しさん 社会人相手にこんなことする主婦って実在するのかよ

012 投稿者 >>11 実在するかは知らんけど、うちの近所では起きた

013 名無しさん 太もも内側を這う指の感覚が伝わってきて、続きが読みたい

014 名無しさん また鍵の話か、盛ってる感が前回より強くなったな

実況台本

ん……熱い。こんなに熱いなんて……私ったら、指が勝手に動いてる。

これを……あかりの部屋の鍵を、こうして渡すなんて。夫はまだ出張で帰ってこないのに。

拓也くん……？　こんなところで、こんな時間に……

……鍵、持ってて。いつでも、来ていいから。

いや、違う……こんなこと、言っちゃだめ。夫がいるのに、あかりがいるのに。

でも、指が離れない。沈み込む感触が、じわっと残ってる。梅雨の夜の湿った空気より、こっちの熱の方が濃い。

拓也くん、顔が近い……。目が、揺れてる。

私、抵抗しなきゃいけないのに、声が……震えてる。

これ、返してって言わなきゃ。なのに、指が緩まない。

……どうして、こんなに懐かしいんだろう。二十年近く前の、誰かの匂いと重なっちゃう。

だめ。夫のことを思い浮かべなきゃ。なのに、拓也くんの腰のラインが、指の記憶に焼き付いて離れない。

……来て、いいから。

……来ないで、って言わなきゃ。

雨の音が、遠くでしてる。まだ明けない夜が、部屋の中に沈んでる。

私の手は、まだ鍵を握ったまま。熱が、掌から伝わってくる。

これ以上、近づいたら……どうなるか、わからない。

でも、離せない。

……雨の音が、少しずつ大きくなってきた。窓の向こうで、梅雨の夜がじっとり重く沈んでる。

指先が、鍵の冷たさにまだ触れてる。なのに、拓也くんの体温が、なぜか掌の内側に残ってるみたいで……抜けない。

夫の匂いを、思い浮かべなきゃ。二十年一緒に寝てきた、あの寝息を。なのに、さっき触れた拓也くんの腰のラインが、指の腹に焼き付いて離れない。

……来ないで。来ちゃだめ。

でも、声が、ちゃんと出ない。

鍵を握る手に、力が入る。離したくないわけじゃない。ただ、離すタイミングが、わからないだけ。指が少し震えて、鍵の先端が掌に食い込んでくる。

あかりが、隣の部屋で寝てる。まだ気づいてない。父さんも、出張で十日くらいは帰ってこない。……その隙に、何かが、じわじわと這い上がってくる。

これを渡したら、拓也くんは、いつでも来られるようになる。夜中でも。雨の音がうるさい夜でも。

私は、ただ鍵を渡しただけ。なのに、なぜか胸の奥が、熱くなって、息が少し浅い。

……拓也くん。

この鍵、……持ってて。

雨音が、窓ガラスを叩く。まだ明けない夜が、部屋の中にゆっくり沈んでいく。私の手は、鍵を握ったまま、少しでも震え続けている。

ここまでが体験版です。続きは製品版で――

第2部では、音声実況の第1トラックをお楽しみいただけます。

サークル：TOR-NET